

東日本大震災 ともしび会ニュースレター

2021
April

ごあいさつ

今年は、2011年3月11日の東日本大震災から10年という節目の年を迎えることとなりました。

世界中が新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、今までにない困難を強いられた生活となってしまいました。あたりまえの生活がどれほど幸せだったのか、私たち一人一人が、今、その思いをかみしめています。

10年前に突然あたりまえの生活を奪われた学生たち。当時小学生だった彼女たちは、悩み、苦しみながらも皆様からの経済的な支えをいただき、たくましい精神力を培い、自ら生きる力を育み大きく成長しています。今年ご支援いただいた6名の学生のうち2名がこの春、社会人として巣立つことになりました。

ご支援していただいたすべての皆様へ彼女たちからの感謝の思いをここにお届けさせていただきます。

東日本大震災ともしび会
代表 柴山 恵子

ごきげんよう。

この度は二年間にわたり温かいご支援を頂き、誠にありがとうございます。

皆様のおかげで充実した学生生活を送り、卒業を控えることができた今、感謝の気持ちでいっぱいです。

また、今年度はコロナ禍という異例な一年となり、アルバイトも思うようにできない中で、皆様からの支援金が生活の支えとなりました。心から御礼申し上げます。

東日本大震災当時、私は小学四年生でした。津波で何もかもを失い、先の見えない不安な日々でたくさんボランティアの方々に出会い、物や言葉で支援を頂きました。当たり前の生活が失われるという経験したことのない大災害を乗り越えられたのは、日本中・世界中の人々からの助けがあったからだと思います。人はひとりでは生きていけず、誰かと支えあって生きているのだと感じました。

二〇二二年、震災から十年を迎えます。被災地の復興は進み、私の地元の街並みも新たな姿として賑わいを取り戻しています。

そして、私は桜の聖母短大を卒業し、栄養士として社会に出ます。東日本大震災という大災害を乗り越え、短大に進学し、学ぶことができたのは、家族はもちろん、温かい支援をくださる周りの方々のおかげだと思います。

この二年間、桜の聖母短大での学びは本当に充実したものでした。同じ夢を持つ仲間と出会い、ともに学び、楽しい学生生活を送ることができました。栄養教諭の免許取得にも挑戦し、教育というものの難しさや楽しさ、やりがいを知り、食育の重要性を感じました。

春からは保育園の栄養士として、自分の理想とする子どもたちを笑顔にできる栄養士をめざして精一杯がんばってまいります。また、栄養士だけではなく、栄養教諭の資格も活かしてスキルアップしていきたいと思っています。食は生活の基盤となり、食べることは心も身体も満たしてくれます。そんな大切な食事を作る人間として、食べてくれる人に寄り添い、想いを込めた食事を提供できるようにになりたいと思っています。そして、誰かの役に立つ栄養士になり、社会に貢献していきたいです。

最後になりますが、この二年間不自由なく大学生活を送ることができ、たくさんの方の学びを得られたのは、ともしび会の皆様からのご支援のおかげです。本当にありがとうございます。この感謝の思いは忘れません。皆様から頂いた温かい気持ちを胸に今後も頑張ってまいります。ありがとうございます。

(生活科学科 食物栄養専攻コース 二年)



ともしび会の皆様へ

この度は長期間に渡り、たくさんの温かいご支援をいただき誠にありがとうございます。ご支援をいただき誠にありがとうございます。

私は福島県飯館村出身です。震災が起きた日、避難生活、支援を受けての感謝の気持ちをここへ綴りたいと思います。

私が震災を経験したのは小学三年生の時でした。その日は、育児休暇を取っていた前担任の先生が、ちょうど産まれたお子さんを連れ、学校へ戻ってきた日でした。久しぶりに会った担任の先生、可愛らしい赤ちゃんの顔、今でもよく覚えています。先生との再会を終え、一人でいつもの下校道を歩いていました。

すると突然地面が揺れ始め、近くにあった家や建物が大きく揺れ始めました。急なことで焦っている私を見て、近くにいた知り合いのお姉さんが「大丈夫大丈夫」と言って私を抱きしめ、守ってくれていました。揺れは段々と収まり、たまたま通りかかった友人のお母さんの車に乗せられ、急いで家へ帰りました。家へ着くと、姉が一人で泣いていました。私はすぐ姉の側に駆けつけ「お母さんに電話しよう」と言い、当時姉が持っていた子ども用ケータイで母へ電話をしました。

しかし圏外になっていて、電話は繋がりませんでした。しばらくしてから家族が帰ってきました。ですが、もうそこからは大変な毎日でした。ガス・電気・水道は全て止まってしまい、三月という冷え込む時期に大きなローソク一本で過ごす毎日が続きました。

漫画のようですが、本当にそんな毎日でした。スーパーに行っても食料などもう売り切れていて、お風呂にもまともに入れず、これからどうしようという不安な毎日でした。

それから次に私たちを襲ったのは、放射線です。飯館村が最も多い数値を示し、ここでは暮らせないと現実に突きつけられ、目の前が真っ暗になり、生きる術を見失いました。

そこで、私の母は、大阪へ避難するという大きな決断をしました。母の妹家族が大阪に住んでいたからです。放射線が収まるまでと思い、一週間程で帰って来れるものだと思っていました。しかし状況は悪化し、帰ることは不可能になりました。

私たちはそのまま大阪に一年半住むことになったのです。大阪で出会った人達はみんな心温かく、私を歓迎してくれました。何も持ってきていない私に習字セットをくれたり、家具をくれたり、本当に優しい人ばかりでした。

ただ、ひとつ心が痛くなった出来事があると言え、同じ団地に住んでいた住民の方に、家の鍵穴に接着剤を入れられ鍵が通らないよう細工されたり、母の車の鍵穴が壊されていたりなどです。

つらい時も、もうやめたいと思う時もありましたが、家族の協力や出会った心優しい方々のおかげで生活を送ることが出来ていました。

一年半経ち、福島へ帰れるという見通しがついたので、福島市へ引っ越ししました。小学校は川俣町にある仮設の校舎へバスで通いました。

以前の友達と再会を果たし、とても楽しい毎日でした。中学校は市内の中学校へ、そして高校へと進学し、現在ここ桜の聖母短期大学で保育の勉学に励んでいます。

今、このように不便なく勉学に努められているのはご支援くださったともしび会の皆様のおかげです。震災を身をもって経験し、周囲の人々に支えられながら生きていくこと、改めて実感しました。

また、福島から大阪へ避難し、分らないことだらけの私を温かく受け入れてくれた大阪の友人や先生方、地域の方々、いつどんな時も強い味方でいてくれた母にも、心から感謝しています。

私もいつか、誰かに感謝されるような、誰かの為になれるような、そんな人になりたいと思っています。

最後になりますが、私も含め、家族全員がともしび会の皆様に支えられ、このような不自由な生活を送ることができています。この御恩は、一生忘れることのないものです。

本当に、心から、ありがとうございます。

(生活科学科福祉子ども専攻)

子ども保育コース 一年



ごきげんよう。ともしび会の皆様、二年間という長い期間の中たくさんのご寄付をいただき誠にありがとうございます。卒業を控え、改めてこれまで支援してくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱい입니다。

私がこの桜の聖母短期大学に入学して勉学に励むことができたこと、素晴らしい学校生活を送ることができたのもともしび会の皆様のおかげです。また、自分の将来について考え就職活動をし、無事希望した企業から内定をいただくこともできました。以前の私では考えたことのないような、受かることができなかったように思います。今の私がいるのは、桜の聖母短期大学に通いこの場所で学生生活を送ることができ、自分の秘めた可能性に気づくことができたからです。

桜の聖母だからこそ経験できたことはたくさんありました。はじめは必須だから、と行っていたボランティア活動も、次第に楽しいと感じる自分がいることに気づき、自らボランティアサークルに入り様々なボランティア活動を通して人の温かみややさしさを肌で感じるようになりました。

さらに、桜の聖母は授業だけでなく学生生活においても一人一人にとても寄り添ってくれました。いつでも頼ることができる人がいるというのは安心感がありましたし、とても心強い存在でした。

特に就職支援は一人一人に寄り添っており、分らないことや不安なことをすぐ相談・質問できる環境が整っていたことは助かりました。一人一人に行き届いた支援ができるのは桜の聖母短期大学だからこそだと思います。私はこの学生生活の中で自分自身の視野を広げることもできたように思っています。授業の中で異文化やたくさんの人生に触れることもできました。

そこでは、様々な考え方や生き方に触れることで自身の考えの固さを感じ、柔軟性の重要さや人の考えを否定しないことを学びました。自分がされて嫌なことではないという当たり前のようなことをもう一度考えさせてくれるようでした。

さらに授業と講座として、経済学やファイナンシャルプランをまなぶことができたのは貴重でした。ライフプランを考えることは、すなわち生き方を考えることであり、自分の未来を考える時間でもありました。

人生に備えるという面でも、自分自身の人生そして資産計画を立てられるよう、深い知識を持つために検定試験合格を目指すのも一つ目標にしたいとも考えています。

震災当時は小学四年生でありました私も、今は大学生そして来年からは社会人です。

これらすべての経験を活かし、私は今まで様々な面でお世話になった地域へ恩返しができるようにと、地域に密着した企業に就職を決めました。社会人という新たなステージに立つことに当然ながら不安があります。

しかしだからこそ私は可能性に満ちているとも考えます。やらない後悔よりやって後悔という言葉を胸に社会に飛び立つと思えます。

最後になりますが、今まで何不自由ない生活を送ることができたこと、心から感謝申し上げます。

桜の聖母短期大学に通い素晴らしい学生生活を送ってこられたのも、支援をし

てくださったともしび会の皆様のご支援のおかげです。

皆様のご支援があったからこそ、家族の負担を少しでも減らすことができ、二年間という限られた時間を大切な友人たちと過ごすことができました。改めて皆様に御礼申し上げます。

二年間という期間、温かいご支援をありがとうございました。

(キャリア教養学科 二年)

ごきげんよう。このたびは温かいご支援、誠にありがとうございました。

震災当時、私は小学三年生でした。地震が起きた時は、学校が終わった後で母と祖母の三人で車の中이었습니다。車内においても分かるほどの大きな揺れに恐怖で泣き出してしまったことを覚えています。揺れが落ち着いた頃、家に姉一人を残していたためすぐに家へ帰りました。

母から聞いた話ですが、家の中は食器類や冷蔵庫の中身が飛び出しており、足の踏み場がないほどにぐちゃぐちゃになっていたそうです。貴重品と少しの食べ物を持って母の実家へ向かい、一晩過ごしました。夜間も分刻みで余震が訪れ、そのたびに家が揺れるのを感じながら寝るのは生きた心地がしませんでした。次の日に、親戚を含め皆で避難する為に車で移動したのですが、道路に出ると見たことのない景色が広がっていました。途切れることのない車の列でした。

私はこの時に初めて、この状況がただ事ではない、と感じました。最初は川俣

の小学校の体育館に行きました。避難場所に着いた時間が夜だったということもあり、既に体育館内は避難してきた人達でごった返していました。三月の寒空の下、体育館の外で毛布を抱いて座っていると、エンジンをつけたままで母、姉、私の三人で毛布をかけて一晩過ごしました。次の日には、川俣に母の知り合いがいるとのことで、ありがたい事にその方のお家にお邪魔し、一ヶ月ちよっと生活させて頂きました。

そんな中で、私は一生忘れない記憶があります。それは、二日目にお昼で食べたペヤングのソース焼きそばとアジフライでした。

当時は食べ物をお店で手に入れるのは難しいほど物資が足りなく、物資の供給も届いていない状況で、幸運にも川俣にある小さな商店で、アジフライと焼きそばを買うことができました。

姉と二人で分け合って食べたのですが、とても美味しかったことを今でも鮮明に覚えています。

私は今、桜の聖母短期大学で食物栄養を専攻しています。将来は管理栄養士になりたいと思っています。単純に食べるのが好き、料理が好きという理由もありますが、一番は震災を経験し、人にとって「食」という存在がとて大きいことを知ることができたからです。私は二年次で行う特別研究では桜の聖母短期大学で学んだ事を活かして、おいしく食べられる非常食の食品開発をしたいと考えています。震災は私にとってとても辛い経験で

したが、こうして今の目標のきっかけになっています。今ではとても貴重な経験をしたと思っています。ともしび会の皆様からのご支援は、経済的にも私の精神的にも温かく支えてもらっています。大学生生活で忙しく大変なこともたくさんあると思いますが、日々向上心を持って「愛」と奉仕に生きる良き栄養士になれるように勉強に励みたいと思います。

(生活科学科 食物栄養専攻コース 一年)

ともしび会の皆様、ごきげんよう。このたびは温かいご支援を頂戴いたしました。心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

私は二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災で南相馬市から福島市へ避難してきました。当時小学三年生だった私は福島市にある祖母の家に向かう車の中で大きな揺れを経験し、「本当におばあちゃんの家に行けるのかな」という大きな不安を感じたことを覚えています。父は南相馬市に残っていたため、父から送られてきたぐちゃぐちゃになった私の部屋の写真は今でも忘れられません。

その後は放射能の影響で帰ることが出来ず、祖母の家の近くのアパートに住み始めたため、あの日以来南相馬市の家には帰っていません。そのため、小学校の時の友人は元気に過ごしているのか、小さい時に沢山行った八百屋のおばあちゃんは今元気になっているのか、そもそも皆生きていますのかと考えてしまうこともあります。

小学校四年生からは福島市の学校に通い始め、大きな不安を抱えながら通っていましたが、友達が沢山でき、徐々に楽しい生活に慣れることが出来ました。しかし、金銭的な余裕は無かったため、高校に入ってから「大学に行くことは出来ないだろう」と諦めていました。

しかし、担任の先生が「校の聖母短期大学は支援も充実しているし、なりたい職業もきつと見つかるよ」と教えてくださり、オープンキャンパスに参加した時に私も先輩方のようにキラキラした大学生を送りながら夢を見つけたと思うようになりました。その後、家族と相談を重ねた結果「大学でやりたいことをやっていいよ。支えてくれる皆さんに感謝しながら楽しい大学生活を送ってね。」と言われ、念願の大学生になることが出来ました。大学での学びは高校生までのものと違い、自分と向き合う機会や社会と向き合う機会が増え、今までよりも広い世界で生きていると日々成長を感じることが出ています。また、様々な学びを通して「誰かを笑顔にすることが出来る人になりたい」と考えるようになり、就きたい業種まで絞ることが出来ました。

今年就職活動も本格的に始まるため、皆様からのご支援に感謝しながら学び続け、ともしび会の皆様にも笑顔を届けられる人になりたいです。

ともしび会の皆様との出会いが無ければ、私は大学生活を送ることもなりたい自分を見つけないことも出来ていなかったと考えると、「ここまで成長させてくださった」とともしび会の皆様には感謝の気持ち

でいっぱいです。これからの大学生活も支えてくださっている皆様に感謝しながらより成長していきたいと思えます。本当にありがとうございます。

(キャリア教養学科 一年)

ごきげんよう。ともしび会の皆様、たくさんのご寄付をいただき誠にありがとうございます。

東日本大震災の影響により、家庭での収入が減少してしまい、さらに今年度は新型コロナウイルスの影響を受け、生活の一部が制限されてしまい、アルバイトもできない中、ともしび会の温かいご支援により、充実した学生生活を送ることができています。将来の夢である保育士になるために学校へ通えているのは、ともしび会の皆様のお陰です。私は、東日本大震災のとき小学三年生でした。教室で帰りの会をしていると、突如立ってられないほどの大きな地震が急に起こり、机の下に隠れ、地震が収まるのをただただ待っていました。余震もあったことから長くて大きく、今までに体験したことのない地震でした。

しばらくすると、普段は母が車で迎えに来るのですが、その日は父が自転車で迎えに来てくれました。外に出ると正門前の階段が割れていて、とても衝撃を受けたのを覚えています。母はその日、姉と当時まだ一歳の甥と生後三か月の姪を連れ、海端の祖母の家に遊びに行っていました。普段泣かない甥が異常なほど泣き、なかなか泣きやまないため帰宅し

たときにあの地震が起こったのです。父は、趣味の魚釣りのため港に来ていたが、船に乗る前に地震が来たため自宅へ帰った後、津波警報が鳴り海端の住宅や港にたくさんあった船たちは跡形もなくな流されてしまいました。私はあのとき、もし甥が泣いていなかったら、もし父が船に乗っていたら、と思うと今もまだ胸が締め付けられとても泣きたくなります。祖母は、祖父の急速な判断の下、近くの山の上の神社に登ったことで、今も元気な姿に会うことができています。その後、原子力発電所が爆発し、警戒区域に指定されたため福島市に避難しました。体育館での生活は、まだまだ子どもだった当時の私からすると、他から避難してきた子どもたちや近くにあった大学生たちが遊んでくれたため、楽しい日々であつたという間でした。その後、旅館での生活が始まり、初めての転校を経験しました。たくさん辛いことも悲しいことも震災を通し経験しましたが、この震災がなければ出会えなかった人もたくさんいました。どれも私の人生のかけがえない思い出です。

最後になりましたが、改めてこの約一年間何んもなく充実した生活を送れていること、私自身も家族も、ともしび会の皆様に心から感謝しています。月一での先生との会話に私はとても助かっています。いつも親身になって相談に乗ってくださいありがとうございます。残りの学生生活も何卒、よろしく願います。

(生活科学科福祉子ども専攻)

子ども保育コース 一年

ともしび会事務局

福島県福島市花園町3番6号
熱海紀子・齋藤桑子
☎024(531)6805
Email : s-soko@ssg.ac.jp

ご寄付振込先

【ゆうちょ銀行】02230-4-126091
東日本大震災ともしび会寄付金口
【東邦銀行 本店】普通預金3682660
東日本大震災ともしび会
代表 柴山恵子

東日本大震災から十年目を迎えた三月十一日。今年は、世界中が新型コロナウイルスの影響でいろいろな不自由をお互いに抱え、支え合う日々となりました。あたりまえの日常がどんなに幸せだったのか、震災と重ね合わせながら、皆様に感謝をし、希望に満ちた子どもたちが綴ったお手紙に胸が熱くなります。皆様からのお力添えを励みに今後も未来ある福島の子どもたちを応援し、寄り添ってまいります。

末筆となりましたが皆様からお寄せいただきましたご厚情に重ねて御礼申し上げますと共に皆様の上に神様が豊かに報いくださいますようお願い申し上げます。

感謝のうちに
ともしび会事務局
熱海紀子・齋藤桑子